

平成29年度 第6回小平市農業振興計画検討委員会 会議要録

1 開催日時及び場所

日時：平成29年8月10日（木）午前10時から11時30分まで

場所：市役所6階 大会議室

2 出席者

(1) 委員

10名

(2) オブザーバー

滝澤地域振興部長

(3) 事務局

市：産業振興課板谷課長、同増原課長補佐、同石田係長、同鎌田係長、同十河、同飯泉

多摩信用金庫：地域連携支援部 嵯峨調査役、鈴木

首都大学東京：都市環境学部 太田特任助教、URA室 中西主幹URA

(4) 傍聴者

0名

3 配布資料

資料① 小平市農業振興計画検討委員会委員名簿

資料② 農業振興計画骨子案

資料③ 農業振興計画重点施策案

資料④ 農業振興計画骨子案

資料⑤ 今後のスケジュール

参考 小平市産業振興基本計画及び小平市農業振興計画の策定に向けた基礎調査報告書

4 内容(議事要旨)

(1) 新委員紹介、副委員長選出

高橋副委員長の退任に伴い、新たな副委員長に竹内委員が選出された。

(2) 報告 小平市産業振興基本計画及び小平市農業振興計画の策定に向けた基礎調査報告書の修正について

『小平市産業振興基本計画及び小平市農業振興計画の策定に向けた基礎調査報告書』について、修正があったため報告書を再配付することについて、事務局から説明した。

(3) 議題

農業振興計画骨子案について

事務局から資料②を用いて、農業振興計画骨子案について説明をした。

農業振興計画重点施策案について

事務局から資料③を用いて、農業振興計画重点施策案について説明をした。

(委員長) 現在の重点施策案はあくまでも例なので、追加や削除について議論していきたい。

今の説明について質問、意見はあるか。

(委員) 生産緑地について、現在の案だと農業委員会の役割が出てこないが、農業委員会の力も必要なのではないか。

(委員長) 生産緑地の維持における農業委員会の役割はいかがか。

(副委員長) 生産緑地として適正な管理をしていくべきだと思う。生産緑地の中でも模範的な農地、逆に一般市民から見るとこれが農地かというものも見受けられる。市民から生産緑地は必要だと思っていただけるように農業委員会では取り組んでいる。

(委員長) こういった指導というものも計画に加えていくということによいか。

(委員) お願いします。

(委員長) 他に意見はあるか。

(委員) 農業経営支援のところで、新たな技術の導入とあるが、新しい技術は良いか悪いかやってみなければわからない、という意識に対しての施策だと思う。すでに実績のあるものについてはなかなか行政の補助が付きにくいところがあるが、既に実績のある技術を広めていく、結果が出ているものをさらに広めるということを取り入れると農家さんも安心して取り組みやすいのではないか。

(委員長) それは重要な点だと思う。具体的に実績のある技術として注目すべきものとはどういうものがあるか。

(委員) 一番取り組みやすいのは機械化である。新技術の機械化であれば行政も動きやすいと思うが、既に実績があって取り組みたいが設備投資するにはためらいがあり、なかなか普及拡大しないところもあると思う。

(委員長) この案で考えていたものとしては、流通の面での新しい技術やノウハウとして、ICT化とかスマート農業を考えたが、流通の観点で新しい技術といったものはあるか。

(委員) 流通については、新技術を取り入れて流通を拡大した場合に需用に供給が追いつかない。今の時点で需用と供給のバランスがぎりぎりである。担い手の育成や活性化をしていけばさらに供給が上がっていくだろうというバランスだと思う。流通システムを作るには当然のことながら、生産をどうしていくのかを考える必要があるが、やはり機械化は必要だと考える。

(委員長) テレビ番組で過疎地域の農家の人たちがタブレットを持って注文数や生産量を管理しているということが紹介されていたが、そういったことはどうか。

(委員) 大型の産地の話であり、いわゆる地産地消の地域で生産、販売していくのであればタブレット等は合わないと思う。その費用を違うところに回したほうがよいのではないか。農家さんの意見も聞いてほしい。

(委員) インターネット販売の勧誘で1日の売上が倍にもなりますよ、と言われても生産が追いつかないし、手数料が売上を上回ってしまうことも予想されるので、むしろ地域で上手く流通させた方がよい。直売所で片方では売れていてもう片方ではそうでもない

ということもあるので、上手く荷を動かしてもらえると良い。少し増やすというのは皆できるので、順々に増やしていくこともできる。外へ出すということは難しいが、今年、トウモロコシは農協のほうでかなり徹底してもらって区部の学校に出した。その方が各農家は1割ぐらい増やして、ということが可能であり効果があると思う。

(委員長) 農家にとっては、需要と供給のバランスを上手く把握できるようなプログラムがあると良いということか。

(委員) そのとおり。来年どういうものを作ってください、という要望があるとそれに応えることはできる。

(委員) 今、トウモロコシの話がでたが、外の業者と相談して余裕を持って1万本生産してもらったが買い手がついた。農家さんをお願いして量産してもらおうというようなやり方で着実に増やしていくほうがあっているのではないか。あまりそればかりやると地産地消と言いながら外の注文ばかりで市内に野菜がなくなるというようなことも起こりうるかと。今の農地の現状からいって、着実に一歩ずつやっていく方があっているような気がする。

(委員長) 農業振興計画の1番の柱の地産地消の促進という点について、意見はあるか。

(副委員長) 小平農産物のブランド化という点では、以前、小平はスイカが有名であった。当時は今のような直売所はあまりなく、市場に持っていかないと捌けなかった。農地の減少によって、1つの作物だけを作っているということからだんだん変わってきて、今のような直売の形になった。このため、地元市場での地位を確立するというのは良いが、そのためにはかなりの量を出荷しなければならず、今からそういったことをやるのは無理ではないか。そうすると、地産地消として市民に訴えかけるようなアプローチが良いのではないか。

(委員) 色々なデータを使って小平市内の食料自給率を計算したことがあるが、まだまだ地元で買っていない野菜も多いので、市内の自給率を上げていくというのも注目して取り組んでいったほうがいいのではないか。

(委員長) 市内の自給率向上プログラムみたいなものを立ち上げて、目標を立てると、農家の人も1つの目標になるだろうし、市民の方も協力することで、安心して安全、新鮮な農産物を買うことができ良い。

他に、農のあるまちづくりのための施策は農家だけではなく、住民との関わりの中で農業をどう考えていくかについてのプログラムであるが、そういった事について意見を。

(委員) 各実施プログラムの内容は良くまとまっているように思う。基本方針の中で、所得や税収を生み出す農業とあり、確かに農業所得が増えれば後継者問題の解決、農地の保全ができるようになるので、農業収入をどのように増やすか、いろいろなプログラムを考えてベーシックなことをやっていくべきだと思う。それと、後継者がおらず、農業経営が危うくなっている農業経営者をどのように支援していくかという視点も欠けてはいけないと考える。

先ほど需給バランスの話があったが、これ以上生産拡大することはなく、販売高を増やすということになると、農業経営が軌道に乗っている農業者にとってはある程度

頭打ちになるのではないかと思った。しかし、毎年生産緑地が減っていき、このままでは公共財としての意味合いも強くなってきた小平市の都市農地が消えていく、これを何とか保全することも大きなテーマであると思う。国の政策も大きく転換したわけであるから、これからどうやって現状の農地を保全していくのかということに注力していかなければならないのではないか。

そこで農地という空間が大事な都市空間であると考え、多くの方のためになる多面的な要素をもっと評価するべきである。農業経営が今一步という方は保有農地の何割かの農業経営を地域住民に手伝ってもらいながら、農業収入の確保、安定化、増大化することを考える必要があるのではないか。

農地に対して様々な圧力があり、農業経営が難しくなる中で、市民と一緒にこれからの農業経営を協力、協業していくという小平市の都市農業の姿が確立できれば、かなり違ったものになるのではないか。一農業者に任せるのではなく、システム化した市民とともに農のある生活を楽しめるところになれば素晴らしい農業振興政策になると思う。

(委員長) 農業には市民のための福利厚生のような機能もあるのだろう。

(委員) もう1つ、情報発信プログラムというのがあるが、大事なことである。PRにもっと注力するべきで、場合によっては専門家の知恵を入れていく必要がある。地産地消をもっと価値のあるものとしてPRできないか。

(委員長) ありがとうございます。他に意見は。

(委員) 枝豆に興味をもち、小平の枝豆はこんなに美味しいのだと思った。枝豆もブランドの1つなのか。

(委員) そうである。市と枝豆ウィークという企画をやった。

(委員長) 地産地消は大事ということ。他に気がついた点は。

(委員) 農業分野の女性の活躍支援というところで、女性による農業ベンチャーの支援プログラムと情報発信プログラムについて、農業における女性としての存在とか価値というものを情報発信して、これから女性とともに農業に参画していくという意味においては非常に意味があるものではないかと思う。

農地の賃借による団地化というのは具体的なイメージがつかないが、どう考えたらよいか。

(委員長) 現状、農地が分散して所有されているが、なるべく自分の家の近くで大きくまとまった方が利用しやすいだろう、ということです。

(副委員長) 同じ生産緑地でも熱心にやっている方とそうでない方がいるので、そうでない方のものをある程度まとめて、個人ではできないことをやるという意味合いもあると思う。

(委員長) あまり熱心ではないところをもう少し利用して大規模化したり、機械化、あるいは多毛作化するということか。

(副委員長) 熱心ではないという言い方は不適切かもしれないが、後継者がいない、高齢化している、先行き新しいことをやる意欲もないと、どうしても熱心さが薄れてくることもある。

(委員) 多毛作化、施設化の推進による農地あたりの収量の拡大について、施設化とは例え

ばビニールハウスを作るなどして、農地あたりの収量を拡大するということか。それとも農機具などを置く施設のことか。

(委員) 前者であると思われる。施設栽培だと冬はできないものができるようになり、そうすると1年に2回3回収穫できるようになるということである。

(委員長) 前者の意味で良い。他に意見は。

(委員) 団地化という言葉はどうかと思う。また、多毛作化という表現よりは農地の効率的利用のほうが良い。それから農業の後継者育成には例として1つ書いてあるが、他にも東京都でもいろいろやっている。例に挙げられている研修は経営の方が中心だと思うが、今は父親と年代が離れていて、直接農業技術を教えてもらう機会が少ない。その様な研修機会も作ってもらえると良い。独身農業者の婚活支援はここに入るのか。担い手の育成となっているが、確保・育成の方が良いのではないかと考える。

女性農業者はどうしても人口が減っていく中で、何らかの労働力として考えていかなければならないと思った。

(委員長) 後継者育成の支援プログラムの例は指摘のとおり、東京都の支援などもリストアップしていった方が良い。独身農業者の婚活支援はどこに入れたらよいと思うか。ちょっと後継者の育成ではないかもしれない。小平では独身農業者は多いのか。

(委員) 小平に限らず全体的にだが多い。

(委員長) 他に気がついた点は。

(委員) 基本方針の雇用等が斬新で素晴らしいと思う。それを元に考えると、農地の貸し借りは制度の関係で期待できないと思う。ただ、まれに後継者がいなくても生産緑地として更新して残しておきたいという方がいるので、それは貸す対象になるのではないか。市街化区域で非農家のしかも女性の新規就農者を誕生させたいと思っている。

作業受託のシステムを確立することが非常に重要なのではないか。労働力が不足しているところに市民をという発想ではなく、作業受託という発想があってもよい。

雇用を生み出すという点では、立川あたりでは常時雇用して農業経営したいという人もいる。小平では長男が農業経営していて次男も農業をしたいといった場合に、優秀な人材が外に出てしまっている。そういった優秀な人が市内でやっていけるような形をとれるようにしたら良いと思っている。

(委員長) 先月の終わりに佐賀市の30戸ぐらいの集落で高齢化が著しい地域に行ったが、3戸ほど若い人がいた。その人たちが集落全体の農地の面倒をみていて農地が維持されている。そういう作業受託か。

(委員) 作業受託は都会に合わないといわれてきたが、地方では農地の貸し借りができるから作業受託はしなくても良いのではないかと思う。逆に作業受託が必要なのはこういった都市部なのではないか。

(委員長) その辺りも生産緑地の維持で少し加えてもらえると良い。それから、新規就農者はどうしても市街化区域だと難しいが、小平では可能なのか。

(委員) 可能ではあるが、貸せる土地がない。

(委員長) 高齢者の土地を借りてやることは可能か。

(委員) 貸してくれる人がいないので難しいと思う。そういう人がいるのであれば良いと思

う。

まれに納税猶予を受けていて、後継者がサラリーマンだけど、農地を守りたいということがある。本来は後継者がやるべきことだが、貸せるようになればすごくセンセーショナルである。そういう可能性が来年から出てくるが、いろいろ農地制度の問題があり、簡単ではない。

(委員長) そういうことを調べて実施するために農業委員会でも協力して、あるいは農業委員会から情報を与えていくと良い。農業委員会としてその可能性は。

(副委員長) 一番問題なのは税の問題。

(委員) そこが難しいと思う。瑞穂町では新規就農者が入って農家が増えている。今の議論は減少を止めるという話だが、増えるとあるとわくわくする。

(副委員長) 小平でも毎年5人程度Uターンで親が高齢となったため農業をやるといふ人が出てきている。年齢的に60歳近い人もいるものの、小平では一応新規就農者ということで、頑張ってもらっているが、それは次の世代まで続くものなのか。生産緑地の減少を食い止める多少の力にはなるとは思うが、根本的な解決にはならないと思う。

(委員長) 他に質問はあるか。

(委員) 10年ぐらい前に人材派遣をどうにかできないか調べたが、農協では人材派遣業の事業ができないということで、農業法人になるのかもしれないが、どこかインターンとか、女性・若者・シルバー人材など一元的に管理してやっていくような所を作ると人手不足は解消するのではないか。

(委員長) 現在のプログラムや事業例だと人材を確保するという点が女性、若者、シルバー人材と分散しているが、それを一元化してなおかつ請負なども含めながら一元化する組織を作るといふような。

(委員) 昔やろうとしたが上手くいかなかった。せっかくここで話題に出たので議論してほしい。

(委員) ボランティアではなく、人を雇ったから収入が増えたといふようなことに対する需要はある。市街化地域でも人を雇いたいという相談はあるので、小平市でも潜在的な需用はあるのではないか。

(委員) これからの課題といえるかもしれないが、作業の受託といふのは依頼が多いので数か月待ちになっている。ニーズはあるのではないか。

(委員) 援農ボランティアは、今のシステムだとボランティア先の農家さんが決まっているので、受け入れる側も夏の間は忙しいけれど秋からは何もなくてどうしようかとなる。一年間作業があるような大きな農家さんに限られてしまう。技術的にもトラクターに乗れるのかなど、ボランティアではなくて、多少お金を払っても作業委託の方が非常にありがたい。

女性については、奥さんは会議などに出てこないもので、新しいことを始めようとするのは支援があっても難しい。奥さんが少しでも市の会議の場などにでてくるといふになれば、もっとやってみたいといふ方が多分でてくるとは思う。まずは家から出てきてもらうといふところから始めたほうがいろいろなアイデアが出てくるとは思う。

(委員長) 他にあるか。

(委員) 直売所の適正配置について、新しい場所で直売所を作ることは難しい。異業種連携では、個人商店よりもスーパーが小平市内に散らばっていて、すでにスーパーで農産物を販売している人もいる。地場産コーナーを設けているスーパーもあるので、そういうところをもっと活用して、上手く連携していけばさらに農産物の売上が上がると考える。

(委員長) 適正配置というのは、小平は直売所が多いが、半径500mの商圈で円を描くと直売所がない地域がいくつかある。すべて、直売所の恩恵にあずかる地域にするにはどうしたら良いか。また、ブリヂストンの工場の辺りなどで直売所がない。移動販売などができないかと。今あったスーパーの地場産コーナーを強化するということも重要なことだと思う。

皆さんからいろいろな意見をいただいて小平の農業振興が良い方向に行きそうな感じがする。委員から指摘のあった援農のシステム、小平版援農センターのようなものができれば良いと思う。

オブザーバーから意見を。

(オブザーバー) 昨年1年かけて課題が出てきており、それに基づいて検討するための意見をいただいている。

直売など地産地消ということが小平の強みである。果樹であれば梨やブルーベリーがある。先週ブルーベリーまつりがあったが、生果はすぐに完売してしまう。PRの話もあったが、おいしいということをどのように伝えていくのかといったことも非常に大事であると考えます。

(委員長) 今日の議論に基づいてリストを修正して次の議論に進みたい。次の第7回の検討委員会は9月25日を予定している。次回は詳細な計画の素案を提示したい。

(3) その他

今後の日程等について

事務局から、資料④を用いて、今後の日程等について説明した。

(委員長) それでは、第6回検討委員会を終了とする。

以上